

正面スタンドを背に右から左に吹く強い風は、キックの精度を狂わせ、雲一つない空にプレスキックで放たれた楕円のボールは、風に向かい大きく左に反れた。

前日の練習はパースに到着した当日ということもあり、自分たちの身体に問いかけながら行われた。海外とはいえ日本との時差が無いことは多少の救いだったが、さすがに丸1日かけての移動は身体に堪えた。しかし、選手たちにはそれ以上に自分達を奮い立たせることが待ち受けている。それは、本場ラグビーの地、オーストラリアでラグビーができることだった。そして、幸運なことに「スーパー14」のウェスタンフォースのコーチ陣が練習を付けてくれる。

日差しを遮るものではなく、大きな空は開かれている。緑の芝は均等に刈られていた。コーチ、そしてオール鹿児島県の選手たちもお互いの出方を伺うように練習は開始された。静かに始まった練習に「声を出していこう」とチームメイトを鼓舞するキャプテンの声。どのような練習が行われるのか期待と不安で、身体と頭が連動しない。しかし、練習の内容は日本でやってきたことと、そう大して変わりはない。教わる言葉が英語でも、その英語も日本語に訳されて耳に届く。

地元パースのチームとの交流試合。オレンジ色のユニフォームを着たオール鹿児島県の精鋭たちは、何かを確かめるように風を縫い、楕円のボールを追いかけた。鹿児島県花のミヤコキリシマがあしらわれたエンブレムがユニフォームの上で踊る。陣取ったベンチの後ろには、オール鹿児島県の横断幕が張られた。その横断幕は、彼らが選抜抜かれた精鋭たちなんだ、ということを実証していた。

試合後、1人の選手に声をかける。「将来の夢はオーストラリアに戻って来て、プロのラグーマンだね？」と。しかし返ってきた言葉は「分かりません」だった。その言葉を無視して、さらに「そして、ワールドカップに出場だね」とたたみかけると、首を傾げてしまった。そこで「できれば、目指したいよね？」とやさしく聞き直すと、力なく「はあ…」と。

高校ラグビーの鹿児島県勢は、九州の中でも後塵を拝していた。福岡、佐賀、長崎、大分の4県は全国レベルで、今年の全国高等学校ラグビーフットボール大会では、福岡県代表の東福岡高校が全国制覇をしている。昨年の中九州高等学校ラグビー大会では、鹿児島県代表のチームが福岡県、長崎県代表のチームに50～60点差で大敗している。国民体育大会(国体)にも、九州ブロックから出場できる2枠にこれ入っていない。そんな戦績からか、試合をする時はいつも胸を借りるつもりで戦ってきた。試合をさせてもらう、という気持ちがあど

かであった。そういった劣勢から、選手たちのモチベーションも近い将来にしか見えなくなってしまったのだろうか。

午前中に行われた試合後、昼食を軽くとり、午後は昨日と同じ基礎練習が行われた。太陽の光、芝の緑に身体が大分慣れてきたのが分かる。じっとりとするはずの汗が、軽く感じた。前日同様、ディフェンスの大切さ、タックルの基礎を学ぶ。そこでコーチから「ウェスタンフォースの選手たちも毎日、15～25分はこのトレーニングをしている」と告げられる。2度繰り返して言われた。「レベルの差はあるにせよ、今、君たちがやっていることは間違いないんだよ」と言われているようだった。日本でやってきた反復練習が、「なぜしなければならない練習なのか」が少し分かったような気がした。

そして、次の日に行われた西オーストラリア州高校選抜チームとの交流試合。ラグビー先進国のオーストラリアの選手たち相手にどこまでできるか、ここでも胸を借りるつもりで試合に臨んだ。個人の能力は誰が見ても相手の方が上だった。しかし、試合内容は上々の出来だった。後で分かったことだが、彼らは将来、ウェスタンフォースでプレーするかもしれないプロの卵たちだった。そう、自分たちの試合が、ウェスタンフォースのジュニアチームに入団するためのセレクションだったのだ。相手が本気で望んだ試合、そんな試合で結果を出せた。当然、パースに来て2日間の練習だけで飛躍的に力を付けたわけではない。しかし、何かが彼らを動かした。

帰国当日の朝、将来の夢について「分かりません」と答えた選手に同じ質問をしてみた。おどけるように「ワールドカップ出場ですよ、ね」とこちらが期待する返事を笑顔で返してくれた。楕円のボールを追いつづけるその先は、まだまだ未知なのかもしれない。しかし、とにかくいっぱいの可能性を含んでいることは確かなようだ。

本誌記者がみる

次への 一歩

オール鹿児島県高校選抜

